

南齊竟陵王文学の八友について

春 日 禮 智

中国南齊（四七九—五〇二）は高帝の建元元年に始まり、和帝の中興二年に終る前後二十四年、南朝最短期の王朝であった。然も、その全盛期は二代武帝の永明年間の十一年であった。しかし、この武帝の十一年間は、宋の文帝の元嘉の治を範とし、梁の武帝の天監の治を開く、極めて重要な十一年であった。その中心的人物は勿論武帝であったが、武帝の富国為先の武を助けて、その文を發揚し、所謂永明の治の名を後世に残した人は、武帝の第二子竟陵文宣王子良その人であった。南齊を語る場合、その政治文化宗教、あらゆる面で、王を除いては、語ることができないのである。

竟陵王子良（四六〇—四九四）は南朝王族随一、最も声誉の高い人、南齊人のホープであった。彼は司徒、尚書令、太傅等、あらゆる要職につき、筆海、智山と称せられた。彼はその本宅—上邸は、鍾山即ち、今の紫金山にあったが、宋の儒者であり、隱逸であり、晋の廬山慧遠に師事した雷次宗と同じく、建康即ち今の南京の雞鳴寺のある雞籠山に、西邸を造

り、永明五年以后は、専らここを根拠とし、文化、宗教の普及に努めた。南齊書卷四〇、その伝に曰く、

子良敦義愛古、後於西邸、起古齋、多聚古人器服、以充之。又曰く、

子良少有清尚。礼才好士、居不義之地。傾意賓客、天下才学、皆遊集焉。善立勝事、夏日客至、為設瓜飲及甘果、著之文教。士子文章、及朝貴辭翰、皆發教撰錄。

又曰く、

五年、移居雞籠山邸、集学士。抄五經百家、依皇覽例、為四部要略千卷。招致名僧、講語佛法。造經唄新声。道俗之盛、江左未有也。

又曰く、

又、与文惠太子、同好釈教。甚相友悌、子良敬信尤篤。数於邸園營齋戒。大集朝臣衆僧。至於賦食行水、或躬親事。世頗以為失宰相体。勳人為善。未嘗厭倦。以此終致盛名。

以上を以て、王の篤信振りを、はっきり知ることができ。高僧伝、続高僧伝、比丘尼伝に依れば、彼の支持後援し

南齊竟陵王文学の八友について（春日）

た僧尼は、齊梁間において、高僧二十八人以上、比丘尼十一人を数えることができる。

竟陵王文学に就いては、南齊書卷四三、何昌寓伝に、

永明元年、竟陵王表置友。学官。以昌寓、為竟陵王文学。

とあり、永明元年は武帝即位の年であり、まだ王が上邸にいた時の事である。従つて、竟陵王文学の士という国職、学官は、早くから置かれたことがわかる。これは今の国立文科大學教授、文化研究所員の要職である。これは上邸が西邸に移り、専ら西邸学士の称で呼ばれることになった。

竟陵王文学の八友に就いては、先ず梁書卷一、武帝上に出ている。曰く、

竟陵王子良開西邸。招文学。高祖（武帝）与沈約謝朓王融蕭琛范雲任防陸倕等、並遊焉。号曰八友。

又、資治通鑑卷一三六、永明二年正月条に、

記室参军范雲蕭琛案安法曹参军防任王融衛軍車閣祭酒蕭衍（梁武帝）鎮西功曹謝朓步兵校尉沈約揚州秀才陸倕、並以文学、尤見親待。号八友。

とあり、通鑑は繼いて、

法曹参军柳惔太学博士王僧孺南徐州秀才洛陽江革尚書殿中郎范縝会稽孔休源、亦預焉。

とも述べている。又、梁の元帝の金樓子卷三には、八友のもともと思える、次の文章が載っている。

好文学、我高祖（梁武帝）王元長（融）謝元暉（朓）張思光（融）

何憲任防孔広江淹虞炎何憺周顒之儔、皆當時之傑、号士林。

此等の人々と竟陵文宣王との關係は、南齊書、梁書、南史等に詳しく出ている。就いて御研究下さい。

この八友の中、特に梁の建国の謀議に参与した人物は范雲沈約任防であつた。そして、彼等は建国の元勳として、立派な要職についている。又、この三人、梁の武帝の外の、他の人々も、皆、史上着目すべき名士であつた。これに依つて、南齊の竟陵王子良が、南齊だけでなく、如何に後世の人々に重大な感化を与えていたかが、覗われる。そして、その子良門下で、ずば抜けてえらかつたのが梁の武帝であつた。梁書卷一、武帝上に曰く、

竟陵王子良開西邸、招文学。高祖与沈約謝朓王融蕭琛范雲任防陸倕等、並遊焉。号曰八友。融俊爽、識鑒過人。尤敬異高祖。每謂所親曰、宰制天下、必在此人。

と。全く、王融の言の如くであつた。これは梁朝の夜明けであつた。

次に南齊書、梁書、南史、資治通鑑建康實錄等に依つて、八友と竟陵文宣王蕭子良との關係を略述すれば、次の如くである。

（一）梁の武帝蕭衍（四六四—五四九）字叔達。生知淳孝、性方正、篤信正法、尤も釈典に長ず。恭儉莊嚴、芸能博學を以て聞ゆ。竟陵王子良、西邸を開き、文学を招く。八友は、最も

親待せらる。武帝、天監元年四月即位、竟陵王文学の誼を以て、吏部尚書沈約を尚書左僕射長兼侍中となし、范雲を散騎常侍吏部尚書となす。太清三年五月崩す。年八十六。

(二) 沈約 (四四一—五一三) 字休文、性儉素、飲酒せず。嗜欲少なし。詩文に長じ、思想家であった。南斉の初め、文惠太子を奉ず。東宮多士、約、特に親遇せらる。竟陵王、八友を招く。当世号して、人を得となす。范雲、約を引いて、梁の武帝に紹介す。武帝曰く「帝業を成さしむるは、卿ら二人なり」と。後、建昌懸侯に封ぜられ、范雲の上に居る。天監十二年卒。年七十三。聚書二万卷、京師無比と称された。沈約の晩年は、当時の貴顕、軒蓋、門にみつと称せられた。

(三) 謝朓 (四六三—五〇〇) 字元暉。少にして学を好み、美名あり。文章清麗、草隸を美しくし、五言詩に長ず。沈約曰く「二百年來、この詩なし」と。出でて、宣城の太守となる。卒年三十六。

(四) 王融 (四六八—四九四) 字元長。南朝貴族中の名門出身。

少にして神明警恵、博渉、文才あり。子良、その文学を愛し、特に相友好、情分、常に殊なる。南斉武帝の終焉時、後継に、子良を立てんとして失敗し、獄中、死を賜う。年二十七。

(五) 蕭琛 (四七七一—五二九) 字彦瑜。少にして朗悟。縦横の才弁あり。南斉の太学博士。梁の武帝、西邸に在りし時、早く

より琛と狎れ合い、呼んで宗老となす。梁代、宣城太守、江夏太守、南郡太守、東陽太守、呉興太守歴任、侍中となる。中大通元年卒。年五十三。

(六) 范雲 (四五—五〇三) 字彦龍。少にして機警、識見あり。性篤睦、属文を善くす。南斉建元の初め、竟陵王子良、会稽の太守となる。雲始めて王に随う。子良、司徒となる。又、記室参军事に補す。永元二年、国子博士となる。始め雲、梁武と竟陵王邸に遇い、武帝、深く、之を器とす。武帝、兵を挙げ、雲、沈約と同心翊賛す。梁台建ち、侍中に遷る。天監元年散騎常侍吏部尚書雲城侯となる。天監二年卒。年五十三。

(七) 任昉 (四五九—五〇七) 字彦升、身長七尺五寸。幼にして学を好む。司徒竟陵王記室参军。梁武とは、竟陵王西邸に遇い、沈約と善し。南斉明帝の時、侍中となり、宣城郡公に封ぜらる。天監二年義興の太守、六年新安太守となる。卒年四十九。

(八) 陵倕 (四七〇—五二六) 字佐公。少にして学を勤め、属文を善くす。竟陵王西邸を開き、英俊を招く。倕また、これに預かる。任昉と友善、国子博士、尋陽太守となる。普通七年卒。年五十七。

(元大谷大学教授・文博)